

世界原子力大学「夏季研修2010年」に参加して

H22.9.22 日本原子力産業協会 国際部 小西俊雄



今年も Mentor として参加した。3年目である。その感想を簡単に纏めておきたい。

昨年と同じ英国オックスフォード大学を会場に開かれた。参加者は30ヶ国・地域からの若者99名、うち女性は20名。参加者が多かったのはカナダ(14)、米国(12)、韓国(8)。次いでフランス(7)、英国(6)、ドイツ(5)と続く。日本は中国、アルゼンチンと並んで4名の参加。OECD 加盟国を原子力先進国と見なせば、7割を占める。業界別では、産業界が約6割強を占める。



今年も、わが国からの参加者4名は活躍してくれた。各小グループでの交流、選択した特定テーマの議論(Forum Issue)でもそれぞれの特徴を生かして、得るところも大きかったと思う。グループとしてもまとまっていた。韓中台の仲間と力を合わせ「Asia Day」も企画・開催し、他国のフェローに日本の実像を伝えてくれた。Mentor の立場でも喜んでいる。

研修終盤に「8月6日」を迎える。その日の最初の講師が何らかの言及をする例年だが、今年は日本人のフェロー(広島出身)がその被ばく値評価上の意義と「原子力平和利用」への連帯メッセージを朝礼で語り、日本の存在を示してくれた。

来年も、多くの方が参加を考え、また、管理者の方は送り出して国際感覚を持つ中堅を育てる手段として考えていただきたいと願っている。原産の支援事業が役立てば幸いである。

参加者がその得たことを日常業務に生かし、他国の若者との意思疎通を図って国際社会、あるいは国内業務で育ててくれることを願っている。それは、自分の意見を持ち、相手の目線で対話のできる技術であり、話術であり、マネージメント能力である。

日本の原子力で育てば、原子力の知識、マネージメント能力は自ずと身につくと私自身は考えている。国際社会で付き合っていくには、英語で自分の考えを伝え、対話のできる度胸とスキルである。若い人たちに自己研鑽を含めて努力を期待したい。管理者の方にはその機会が持てるように支援していただきたい。

今年も、講師陣の国別分布が偏っていた。その中で今年は原産協会服部理事長が「原子力開発の責務と若きリーダーへの期待」と題して「特別講演」された。良い事である。筆者も昨年同様「水問題(原子力海水淡水化)」について話したが、これは日本からのメッセージではない。

現行炉技術、次世代炉技術、安全文化など、日本を語れる権威は多いはずである。それを世界の若者に伝えるのもわれわれ世代の責任ではなからうか。日本の若者がこれからの原子カルネサンスの流れの中で、他国に伍して活躍するには欠かせない側面支援ではなからうか。機会があれば積極的に立ち上がっていただきたいと願っている。メンター役もフェローとの接点が多いという面で日本を伝える機会が多い。筆者以外にもそれを務める人が増えて欲しい。事務局も望んでいる。

来年も英国オックスフォードで開催される。一昨年までは大陸を巡回しつつ開いてきた。その再現を期待する声は若者にも多い。アジアでは韓国が第3回(2007年)をホストした。日本でこの「夏季研修」を開くことができれば、日本の原子力を伝える上でより効果が期待できるであろう。関係者の理解と協力をお願いしたい。開催時には過去のフェローがきっと積極的に支援参加してくれると信じている。



全体としては、内容豊かで充実した研修だった。夏季研修全体、過去・今年の研修プログラム、参加者自身の感想など、下記の日本原子力産業協会ホームページで紹介している。ごらんいただければ幸いである。

「[WNU 夏季研修の紹介](http://www.jaif.or.jp/ja/wnu_si_intro/index.html)(http://www.jaif.or.jp/ja/wnu_si_intro/index.html)」

(完)